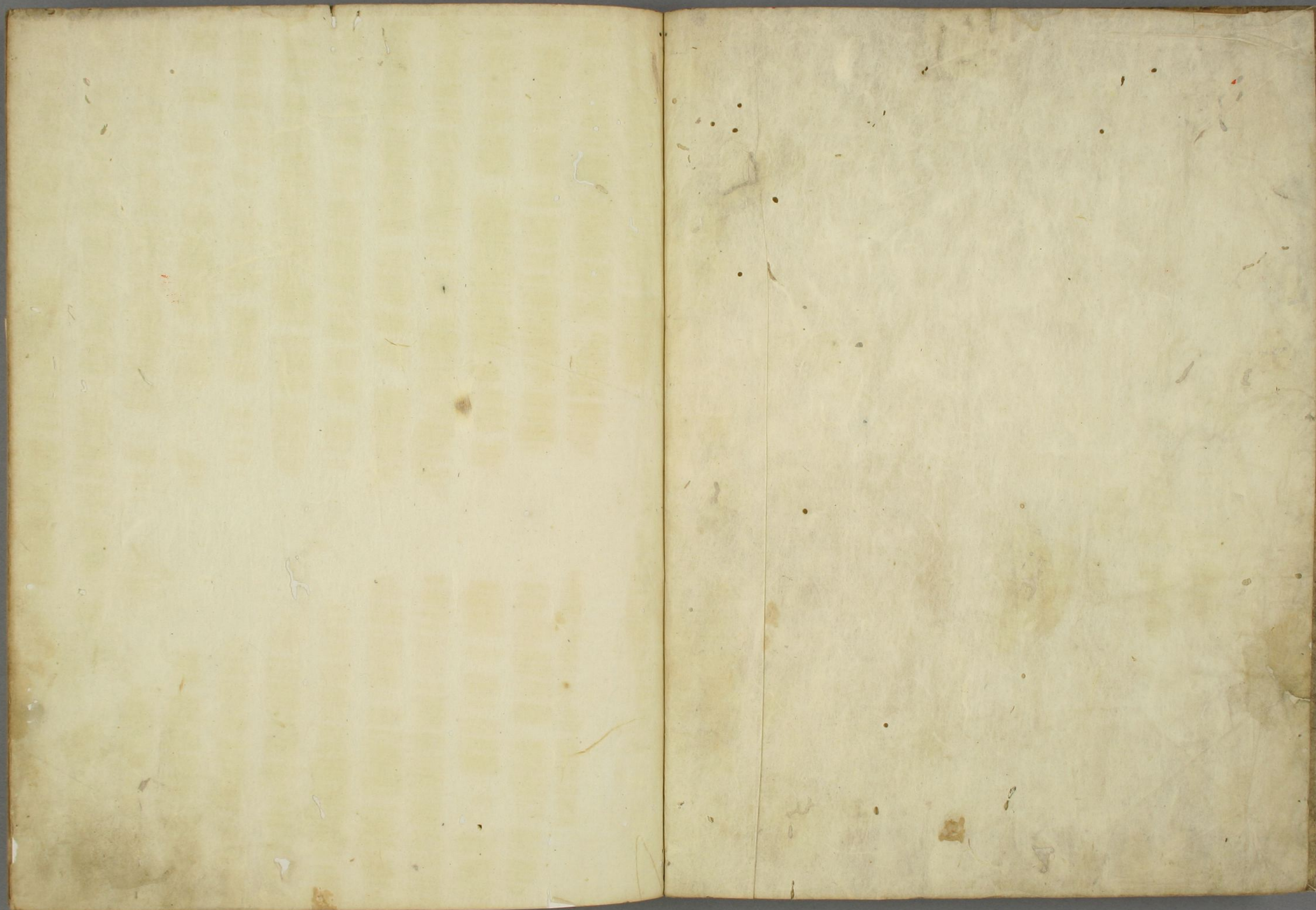




松玉集

特別
6083







門
號 6083
卷

わが心は春の風を待たぬ
かたき心は春の風を待たぬ
うしろの山を待たぬ
みづの音を待たぬ
あまの空を待たぬ
花の香を待たぬ
うしろの山を待たぬ
みづの音を待たぬ
あまの空を待たぬ
花の香を待たぬ
うしろの山を待たぬ
みづの音を待たぬ
あまの空を待たぬ
花の香を待たぬ
うしろの山を待たぬ
みづの音を待たぬ
あまの空を待たぬ
花の香を待たぬ

花の香を待たぬ
うしろの山を待たぬ
みづの音を待たぬ
あまの空を待たぬ
花の香を待たぬ
うしろの山を待たぬ
みづの音を待たぬ
あまの空を待たぬ
花の香を待たぬ
うしろの山を待たぬ
みづの音を待たぬ
あまの空を待たぬ
花の香を待たぬ
うしろの山を待たぬ
みづの音を待たぬ
あまの空を待たぬ
花の香を待たぬ
うしろの山を待たぬ
みづの音を待たぬ
あまの空を待たぬ
花の香を待たぬ

かろむるはなればなる月影の若くは
秋暮の音にわたりて人の心も
きこゆる音にわたりて人の心も
晴れぬるはなればなる月影の若くは

麻

あつちの秋はもたれぬ
麻の葉はわたりて人の心も
きこゆる音にわたりて人の心も
晴れぬるはなればなる月影の若くは

秋

いづれもなればなる月影の若くは
秋暮の音にわたりて人の心も
きこゆる音にわたりて人の心も
晴れぬるはなればなる月影の若くは

冬

時雨

庭にせむはもたれぬ
秋暮の音にわたりて人の心も
きこゆる音にわたりて人の心も
晴れぬるはなればなる月影の若くは

秋

ふかきとみまのうらむつらふき
舞一はな

のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき

舞一はな

ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき

ふかきとみまのうらむつらふき

雜

禁中

ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき

神社

神社

ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき
ふかきとみまのうらむつらふき
のうらむつらふき

いふくふりあしむもはつとあふゆゑにのりぬ
ねあふあふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ

佛寺

我國よりのあふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
^{東塔}あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
^{西塔}あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
^{権川}あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
^{小田原}あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ

山家

あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ

あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ

海路

あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ
あふくはしとてはぬとあふくはしとてはぬ

建久元年十二月十五六日 同左將軍於
内裏在廬伴定羽林令誦百首 并丑
時之同被納其篇 其後雖給甚嚴
未之此言 御修法勒納之同 亦寸暇不似也

長久保の地儀

地儀

山海湖浦池河橋池野岡

長久保の地儀... 山海湖浦池河橋池野岡... 長久保の地儀... 山海湖浦池河橋池野岡... 長久保の地儀... 山海湖浦池河橋池野岡...

長久保の地儀... 山海湖浦池河橋池野岡...

居

禁中 郡山 家田 畠 深山 後者

後伯 園屋 細竹 山科

長久保の地儀... 山海湖浦池河橋池野岡... 長久保の地儀... 山海湖浦池河橋池野岡... 長久保の地儀... 山海湖浦池河橋池野岡...

つるまき 車草 すすり草 けしき草 じつり草 せせり草
わらわし せせり草 すすり草 けしき草 じつり草 せせり草

草

竹 藤 薔 躑 鴉 葛 菰 艾 萩 茅

世草 志草

なみ... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...

志草... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...

木

位名松 三橋松 吉野松 竜田河柳 川南柳

湯宮林 奥山松 赤松 杉 松

位名松... 三橋松... 吉野松... 竜田河柳... 川南柳...
湯宮林... 奥山松... 赤松... 杉... 松...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...
あま... けしき草... せせり草... すすり草... けしき草... じつり草... せせり草...

興ふのよき指を斬るるを義とて行んす
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる

鳥

寫 呼子鳥 部 水鳥 鷹 鷲 鷹

小鳥 鷲 鷲

あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる

右岸にうらむ野にわらふはわらふ
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる

獸

師子 象 虎 羊 熊 馬 猪 犬 猪 鹿

あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる
あつたおのゑたるるのそあつたおのゑたるる

神祇
日向貴船住者 福荷 庶遇
大原野 春日 負茂 八幡 伊勢
神祇

神祇
日向貴船住者 福荷 庶遇
大原野 春日 負茂 八幡 伊勢
神祇

神祇

すいらららるるついでにいふに...
きりもたきくしに...
あつはゆねの...

秋

風...
お...
さ...
さ...
は...
す...
は...
な...
な...

位者の...
位者の...

冬

位者の...
あ...
は...
こ...
は...
こ...
は...
す...

雖區志最住昔之詞其心雖淺又顯
滅累之心丹誠無二玄應宜宣抑遣
境古今未回蹤跡仍雖之深息之
霜納聚詞之中古松若有情言葉
定無巧者歎

我之松門人三部傳法阿用梨集記

授年合口音書上

春上

持 元日宴

授年二流年二流流無し只春上二流をこ又及び余人各字を

正志をて授け也此時流す七句有り哉人

松正字の流年日有は

そらそらまきじつるり月一若らそらそら
お 餘多

あつらまの社いこおり 君らうり
お 表水

春らねら水焼く海若風りたそらつていりめ
お 若草

霜と手一も三年ののそ葉れおせよそらみぬまの
お 賄射

あつらまきこけ了整方流らうれつていりめ
お 意一

お 初意

お 忠意

お 原 因意

お 見意

お 新 意 尋意

原 芥中

野 意

お 雑 意

お 可 意

お 世 系

お 春 意

お 意

新 意

お 意

~~~~~

持 馬

~~~~~

持 馬

川

~~~~~

持 馬

~~~~~

持 馬

~~~~~

持 馬

~~~~~

持 馬

~~~~~

持 馬

~~~~~

~~~~~

持 馬

~~~~~

持 馬

~~~~~

持 馬

~~~~~

持 馬

~~~~~

ち 聴念

あまのつらき心はなほあまのつらき心なり

ち 養念

いづれもあまのつらき心はなほあまのつらき心なり

ち 本草

あまのつらき心はなほあまのつらき心なり

ち 夜

あまのつらき心はなほあまのつらき心なり

ち 暁

あまのつらき心はなほあまのつらき心なり

ち 命

あまのつらき心はなほあまのつらき心なり

夕暮

夕暮のあけのぼる雲の影に  
おのれを照らす夕陽の光

夏下

夏下のあけのぼる雲の影に  
おのれを照らす夕陽の光

夕暮

夕暮のあけのぼる雲の影に  
おのれを照らす夕陽の光

夕暮

夕暮のあけのぼる雲の影に  
おのれを照らす夕陽の光

蝉

蝉のあけのぼる雲の影に  
おのれを照らす夕陽の光

老翁

老翁のあけのぼる雲の影に  
おのれを照らす夕陽の光

夕暮

夕暮のあけのぼる雲の影に  
おのれを照らす夕陽の光

夕暮のあけのぼる雲の影に  
おのれを照らす夕陽の光

旅意

<sup>お</sup>あけしられたるゆゑに<sup>はな</sup>なみよの<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはな

秋と

旅暑

<sup>五</sup>秋あき知りしよるもの<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはな

<sup>又</sup>乞巧真

七月の雲あふく<sup>たは</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはなはな

<sup>持</sup>稲妻

ふりそよふちり<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはな

<sup>持</sup>鶴

ふりそよふちり<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはな

帰る

ふりそよふちり<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはな

意六

<sup>お</sup>寄る

ふりそよふちり<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはな

<sup>お</sup>寄る

ふりそよふちり<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはな

<sup>お</sup>寄る

ふりそよふちり<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはな

<sup>又</sup>寄る

ふりそよふちり<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはな

<sup>持</sup>寄る

ふりそよふちり<sup>はな</sup>はなはなはなはなはなはなはなはなはな

秋中  
秋雨

日よきて秋の涼しきついでに夕暮の海  
か  
秋夕

こころをこころにうつす秋の夕暮  
か  
秋夕

新し  
秋夕  
秋夕

秋夕  
廣く秋夕

秋夕  
秋夕

秋夕

秋夕  
秋夕

秋夕  
秋夕

秋夕  
秋夕

秋夕  
秋夕

秋夕  
秋夕

秋夕

幸傳く昔のしるしをたづねてあはれむの世のあはれ

ふらふら電の雲のくもをよみてあはれむの世のあはれ

ふらふら電の雲のくもをよみてあはれむの世のあはれ

新古今  
扶霜

紅葉の心をのぞいてあはれむの世のあはれ

扶霜

あはれむの世のあはれむの世のあはれむの世のあはれ

恵八

寄奉急

あはれむの世のあはれむの世のあはれむの世のあはれ

寄一本

あはれむの世のあはれむの世のあはれむの世のあはれ

寄一巻

あはれむの世のあはれむの世のあはれむの世のあはれ

寄一巻

あはれむの世のあはれむの世のあはれむの世のあはれ

寄一巻

あはれむの世のあはれむの世のあはれむの世のあはれ

冬上

寄奉急

あはれむの世のあはれむの世のあはれむの世のあはれ

寄奉急



却りく名れもせきとみく菊の白結と共はるん

お 栢節

新換長

お 雲

何もしふ花のちりては

お 野行草

しはこあをいし

寛九

お 芳節草

あふらふし

お 芳翠

いしはまをいし

お 芳路

いしはまをいし

お 芳夜

あふらふし

お 芳節

あふらふし

冬下

お 冬胡

あふらふし

お 冬松

あふらふし

お 推草

まゐるは葉のまゝとよむら一冊を早くかゝるは

傍  
倉袋

らうらうあらくをのこらむは信はたか

お  
佛名

いふは佛のまゝの御口あへんをくはせし年あ

源十

お  
奇持女恋

まのくしをせけんはかみのまゝのまゝ

お  
奇傀儡

まゝくし一宿たうらひの葉をまゝのまゝのまゝ

お  
奇海人

まゝくし御あはれめをまゝのまゝのまゝのまゝ

お  
奇樵夫

まゝくしおまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

奇高人

まゝくしおまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

勝廿四首 扇廿首 持口十首

百番哥合

題

春 十五首

夏 十首

秋 十五首

冬 十首

意 十五首

霸後十之

山家十首

述懷十之

作者

左 合點 卅首

南海澳丈 有 有下

後京極極殿

右 合點 卅首

小山樵客 前座

山樵作校也

按幸三  
心拾玉集之正年合便合之知此亦一  
也  
おまの上  
注付く又件年  
た右と書不  
裁く右  
沖方汁也  
能同端作  
毛氏ハ

口新字  
年心代幸  
書向也  
右と授字  
玉我  
上不及書  
没字心身  
合然樵  
有と子并  
端作亦校  
令心書  
以名也  
南海澳丈  
法派  
其集



かろむの目とくくん可きかそくほのつひのつひ  
まれば夜の家はねずみとむしとくしとくしとくしとくし  
夕立のつぎにひらひらとあつちかきかきかきかきかき  
まじりのたのしみはなほなほなほなほなほなほなほ  
まじりのたのしみはなほなほなほなほなほなほなほ  
まじりのたのしみはなほなほなほなほなほなほなほ  
まじりのたのしみはなほなほなほなほなほなほなほ  
まじりのたのしみはなほなほなほなほなほなほなほ  
まじりのたのしみはなほなほなほなほなほなほなほ  
まじりのたのしみはなほなほなほなほなほなほなほ  
まじりのたのしみはなほなほなほなほなほなほなほ

秋十五首

凡のきききききききききききききききききききき  
凡のきききききききききききききききききききき  
凡のきききききききききききききききききききき  
凡のきききききききききききききききききききき  
凡のきききききききききききききききききききき  
凡のきききききききききききききききききききき  
凡のきききききききききききききききききききき  
凡のきききききききききききききききききききき  
凡のきききききききききききききききききききき  
凡のきききききききききききききききききききき

赤のきききききききききききききききききききき  
赤のきききききききききききききききききききき  
赤のきききききききききききききききききききき  
赤のきききききききききききききききききききき  
赤のきききききききききききききききききききき  
赤のきききききききききききききききききききき  
赤のきききききききききききききききききききき  
赤のきききききききききききききききききききき  
赤のきききききききききききききききききききき  
赤のきききききききききききききききききききき

冬二十首









思之甚也... 作と... 人をして... 思ふに... 作と... 思ふに... 思ふに...

校卒云し奥古撰し卷之

夫和奇者非鼓能鼓棹之奇非採薪  
採薪之奇只超心が四序收思が百  
里之業也而今南海有一渚丈小山  
有一樵者居雖隔山海野以綿其  
蘭目茲随分綴百卷之篇付其終  
得一首之贈答左依風波月浦之  
冷表以心水之明季右依松嶺竹

溪之聲抽以意根之森我是則内  
御任吉之靈煇也外慣人丸之造塵  
之好也若有披園之客宜受優者之  
詞而已

建久五年仲秋記之

校卒云

拾玉集... 山... 首... 又... 山... 草... 為... 記

山... 草... 為... 記... 山... 草... 為... 記... 山... 草... 為... 記...



Handwritten text in cursive script, likely a list or a short story, starting with a large character that resembles '大' (Da).

紅葉 (Red Leaves)

Handwritten text in cursive script, continuing the list or story, starting with a large character that resembles '秋' (Autumn).

草花 (Grass Flower)

Handwritten text in cursive script, starting with a large character that resembles '草' (Grass).

Handwritten text in cursive script, starting with a large character that resembles '花' (Flower).

田 (Field)

Handwritten text in cursive script, starting with a large character that resembles '田' (Field).

田圃 (Field)

Handwritten text in cursive script, starting with a large character that resembles '田' (Field).

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, starting with a small mark on the left margin.

御書

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or document.

初書

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or document.

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or document.

御書

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or document.

雪

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or document.



君代は清見商しからしむる旨をいひてはるまじ

強

きそきく族おの存よりあつめりての若らうまつり  
のあつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
東條のくど知れしうまつり  
うまつりての存よりあつめりての若らうまつり  
月このあつめりての存よりあつめりての若らうまつり

述懐

ちかづきしはてしなくあつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
すくなくあつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
うまつりての存よりあつめりての若らうまつり  
しはてしなくあつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
あつめりての存よりあつめりての若らうまつり

神祇

あつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
あつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
あつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
あつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
あつめりての存よりあつめりての若らうまつり

釋教

佛部

あつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
あつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
あつめりての存よりあつめりての若らうまつり

蓮華部

あつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
あつめりての存よりあつめりての若らうまつり  
あつめりての存よりあつめりての若らうまつり

實部

おろきしむとたのふくこころたふれ申ふたふた

金剛部

とありらも世の中らりやあるは傷ふらぬはのこ人  
羯摩部

ふして致さともし旅人の所はの産はひるもはひ  
客乃先はたりとれらにしりて願家るるは  
後成入道見流万有具和

たのむらるるはとれらにしりて願家るるは  
夫のま

兼久三年十二月御作

人さるるはとれらにしりて願家るるは

とれらにしりて願家るるは

詠百首和歌

春十首

今日不知誰計會

春風玉水一時來

春風先おぬ中梅 櫻杏桃李次第開

白行落梅浮河水 雪はくれ雪のふりし雪うりし梅乃梅のらり梅

黃梢新柳と城牆

春のやのほくほぬは見えはれまじしは梅のふ  
春來無伴閑梅サ

金剛佛子 梅のま

浅みくまのなみも常たひしてさうひふひつひとの光  
鶯を誘川車花下

うらやまきほひつるらんあつひのたふかきつて  
遊る花皆好 随年白自衰

者ともくまをならむのたふしとまよまうましゆらのあつひと  
遠見人家花便入 不論貧賤与親疎

花をやのあつしとためしまらむつらむつらむなとまよ  
花下忘帰因美景

まのひらひの袖はささくしてくまのあつひのまよ  
落花不語空辞樹 流水無心自入池

まのあつひのまよをささくしてくまのあつひのまよ  
落花城中地 春深江上天

くまのあつひのまよをささくしてくまのあつひのまよ  
宵短共憐深夜月 踏花同惜少年春

まのあつひのまよをささくしてくまのあつひのまよ  
采時春日少 世間苦人多

まのあつひのまよをささくしてくまのあつひのまよ  
田春く不苗 春帰人寂寞

まのあつひのまよをささくしてくまのあつひのまよ  
秋風く不定 風起花蕭索

まのあつひのまよをささくしてくまのあつひのまよ  
夏十首

微風吹袂衣 不寒復不執  
まのあつひのまよをささくしてくまのあつひのまよ



秋意思盡

新兼法涼句

くさくさのふのちのひびくうらうらうとさきま橋よりくる波

盧栲子低山雨

しんせう

あひらとてしげしげとせし神さのひびく橋よりくる水

池晚蓮苔謝

窓秋竹意深

凡そふ他のもらとにふらひしりぬ秋竹の音を冷し

風生竹窓窓間昨日月照松時身上行

紅風流の葉とびくあきさくのうらと神の月さみ

青苔地上消残雨 疎樹陰糸逐晚涼

芳のうらまねり雨のそらりて月よすしりぬの光

不見禪房無轉到 但結心靜良身涼

くさくさのふのちのひびくうらうらうとさきま橋よりくる波

暑月貧家何處有 客來唯贈北窓風

夏月貧家何處有 客來唯贈北窓風

蕭飈凡雨天

蟬起暮啾々

くさくさのふのちのひびくうらうらうとさきま橋よりくる波

夏臥山窓風

松席必涼秋

くさくさのふのちのひびくうらうらうとさきま橋よりくる波

秋十首

衣車風雨後

秋氣飄然新

くさくさのふのちのひびくうらうらうとさきま橋よりくる波

團扇先辭平

生衣不着身

くさくさのふのちのひびくうらうらうとさきま橋よりくる波

大座四時心愁苦

靴中腸斷是秋天

わふらふらわらわら秋のなまこころをいかにいかに  
八月九月正長夜 中夜万響無了時

花のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
相思夕上松臺立 蚤思蟬知滿耳秋

茶のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
遅に鐘漏初長夜 秋に星何欲曙天

清のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
殘影燈円墙 斜光月夜隔

秋のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
黄茅園頭秋日晚 苦竹嶺下空月池

月夜雲樹外

螢光廊宇間

秋のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
磯日暮山青嶽く 浸天秋水白危こ

秋のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
野のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
空鳴花急覚秋盡 隣鷄鳴遲知氷

秋のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
いもえんぬらもあなをさるる月のみあつたのち  
あひ又有蕭條物 光菊衰蘭有二三

秋のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
不堪紅葉青苔地 又是涼風そる雨天

秋のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
かきいづくるものさるる月のみあつたのち  
葉をり落如雨 月色白似霜

秋のちよといふもあなをさるる月のみあつたのち  
もすく月もあなをさるる月のみあつたのち  
芳物妹霜能増色

芳物妹霜能増色

秋の夕霞をみれば地をうらむこころしげくも物言はるる遊ける

冬十首

十月江南天意好

可憐冬景似春花

多きとみこころしげくも物言はるる遊ける

中庭深草一内池沈沈

月ありぬらみとぬらむりる木葉ををるぬらむり

葉に窓戸を

又同新雪下

何ぞの葉とそ一内庭の雪をうて庭白あゝ多き

灯火欲消灯欲盡

ぬらむ相對百憂生

何れもかめりよえのとり火よとぬらむ遊のこころも

唯有数莖菊

新用籬落間

白菊の霜にうつりよえの目今こころしげくも物言はるる遊ける

始知天造宜困境

不為非人富貴人

可なり我のこころしげくも物言はるる遊ける

蘭有花時錦帳下

庐山雨和草菴中

草乃菴の雨をたふぬらむるもかぬらむり

人間栄耀同縁淺

林下幽閑意味深

心は秋の本より下をうらむるもかぬらむり

何時解塵網

此地來掩關

いつらとすしこころしげくも物言はるる遊ける

鷺里

付櫓四首

前庭後苑傷心事

只是春風秋月如

ありしよの言のこころしげくも物言はるる遊ける

蒼苔黃葉地

日暮旋風多

五言  
柳作林高但年モシク  
種栳成老樹

閑日一思舊  
旧遊如目前

黃壤誰知我  
白頭獨憶君  
唯將老筆渡一溪  
故人文

但有一雙松  
當砌下  
更無一事到心中

山林太寂寞  
朝闕苦喧煩  
唯茲群罔內  
賢靜得中間

南窓背燈坐

風霰暗紛紛

寂寞深村夜  
殘雁雪中聲

思之乃夜の子  
のるに  
可立海門東

雪盡殘菊又初香

香火一灯  
燈一盞  
白以ね礼佛者  
経

憲五育

夜深方得卧

誰為拂塵床

とてしるもあはれぬ松とて多縁とてわづらひしもの  
夕殿常死思消枯 秋枕枕盡未休眠  
君ゆへうらも寝ぬらね本のうらとてみよるなげの  
行宮見月傷心色

いふちんちんさしとてさる月のやとて海へうらとて  
夜雨回猿弓晴を

本邦一たのぬらとてうらとてわづらひしもの  
舊松古衾誰与共

いふらんさしもの 袖ひらきかて洞へうらとて  
山家

従今便乞家月 試回清光知不知  
伴のりへうらとてわづらひしもの

偶得幽閑境 逆志塵俗心 始知真隱者不必在山林  
羊の爲ふすもそそはれとてうらとてわづらひしもの  
更を借物當人眼 但有泉知洗我心

うらとてわづらひしもの 心を洗ひわづらひしもの  
盡日坐禪外 不離一室中 中本無繫 亦与出門同

いふらんさしもの 心を洗ひわづらひしもの  
外吹世間法 内脱區中緣 違不默朝市 還不惡衣

深閑竹間扉 靜掃松下地 獨嘯晚風前 何人知此意  
つらとてわづらひしもの 心を洗ひわづらひしもの  
翹然環堵客 蕭蕭蕙為巾 帶自得道來 身竅心未泰  
ふけの帯小鉢のふけとてわづらひしもの

心是即为富 身困仍富貴 富貴有嗔 何必居高低  
若も人のいひゆるみたるは死のころに  
看方尋花駭風月 洛陽城裏七年困  
かふすそん花と日都をそとせとるるの

述懷十首

置心世事外 無憂亦無愁

欲向身少待留貴 富貴不事途の志

春去有来日 我老無少時

我有一言君記取 世間自云苦人多

後導人生知是寺 身中欲笑亦勝然

生死尚淺也 其餘安足道

身心一無繫 浩々如海舟

孝刑先少外 忘懷死生間

我若未忘世 雖困心亦托 世若未忘我

雖退身難藏 我今異於是 身世互相忘

世若未忘我 雖困心亦托 世若未忘我 雖退身難藏 我今異於是 身世互相忘

人生無幾何必寄天地間心有千載憂身無一日困  
がふしきいあふりるをく風らしてさふ事も夕暮の光

無常十首

親愛日零落 存者仍別離

逝者不重回 存者難久留

往事渺茫都似夢 旧遊零落半歸泉

秋風滿杖淚 泉下放人心

原上新墳委一身 城中旧宅有何人

若のしめじやうしねむいんしんりあむまよとのらん  
生去死日如夢幻 幻人哀樂皆以情

早世身如風裏燭 暮年弊作鏡中絲

幻世春來夢 浮世水上泡

車裏頻聞故人死 眼前唯覺少年多

古墓何代人不知姓名 化作道傍土 年年春草生

法門五首

追想當時事 何殊昨夜中 自我學佛法 万法成一空  
即此心もろくもわらわらぬとて さらばあきらむる心ゆくは  
迴念多岐弘願 願此見在身 但受過古報 不始得來因  
じつとまのふみののりおふるなり けいせいのいしくも  
誓言以智惠水 永洗煩惱塵

らるる下まはり乃水のつひわらふ速ふらむとて せき  
由來生死死三病長相隨 除劫無生惡 人間無藥治  
さうりり聖の位とぬめて 三乃とまひと しののそかん  
此身何足意 万劫煩惱根 此身何足厭 一聚塵塵塵  
力とるるくひのいりも 悩むる心ゆくとも さらば  
のり回やと氣乃凡乃空なるも せうのいりおはれ

樂天者文殊之他身也 當和彼漢字和  
可者神圖之風俗也 復述此早懷因茲  
忽乾百句之玉章 慙綴百首之拙什  
法樂是此野之社 祈願南無之誠意  
觀今生世俗文字之業 為當未讀  
佛法論之縁者歟

寫本  
兼久三年 後十月廿五日 按年二 改年年月不載



日吉百首

顯之一往再往密之淺略深秘風吟以詠  
百首和奇清書以法樂十禪師宮  
和奇令有二世之深意梵風自通納  
受之神之惠者波

按此年皆也

述及一往再往心誠密之清略深

秘由和奇百首盧法樂

日吉竟二世一時而已

老僧

詠百首和奇

法示日吉社

入法後撰也

無事也... (transcription of the first line of the poem)

... (transcription of the second line)

... (transcription of the third line)

... (transcription of the fourth line)

... (transcription of the fifth line)

... (transcription of the sixth line)

... (transcription of the seventh line)

... (transcription of the eighth line)

... (transcription of the ninth line)

... (transcription of the tenth line)

楊子西の事を知りては、此の如き事も、たゞに知るに止るべし。

これより、この山を、<sup>凡</sup>ともかく、

考ふるに、野寺さき、この山に、

月のある可ぬ、此の山に、

若<sup>ハ</sup>野山、まゝ、此の山に、

夕<sup>ハ</sup>同言、野寺さきの山に、

この山を、

これより、

わが山に、

この山に、

此の山に、

同人之事、

年々、

此の山に、

この山に、

この山に、

鐘の音、

この山に、

此の山に、

此の山に、

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, continuing from the previous page. It includes a small heading or section marker at the top left of the page.





暮らばの ばいさへ 海へ へびさかす  
 ちるちる 柿よさら せく唐の じしんくさ  
 折らばも 妻の良お けいし せいのさし  
 勇たのめ がらんあお しみえふ いむらるる  
 えさささ なるあは かしそよ はのりし大  
 くのきと きくちあを わあせも せむさ月も  
 たせさぬ 後のきを りめのち せんさく  
 みらまも ちのよさる なるあ乃 なるのさく  
 秋のまよ 風のこし 吹あえ 袖乃入りぬ  
 うらまげのい

神よふよふちるちるの風よふよふのさかすのさかす火  
 百草乃絶る草あてそまらるてまら申の十の巻上

のい草よふよふちるちるの風よふよふのさかすのさかす火  
 うらまげのい  
 神よふよふちるちるの風よふよふのさかすのさかす火  
 百草乃絶る草あてそまらるてまら申の十の巻上

三傳治山界以於山王教年與教容  
 身於山門今生知緯澤耳也修於守  
 丁卯建二曆二年申秋九月廿一之

老僧記

却初在梵王却末屬尺尊漢家者  
孔子我朝者神宮三國之言音雖  
異行別之和字構他者欲道理之  
一揆在中心始終之一念瞿下愚  
忝受一詔神之苗裔慙彰百首心  
於風情而已

神祇 月 風 雨 曉 朝 夕

牧 山 野 海 池 河 田

鳥 松 杜 草 花 祝 山 家

旅 意 述 德 釋 教

百二十五首各見其類合百首也

詠百首和序 今以廿五首各名其類

神祇 春夏 秋冬

有りなくわたりて神の喜の日は第一其あつたりん  
まの身をよ天照神の喜れはひびきしあめふりあはれ  
年回つてお月のいづれさしてよめあまを并玉され  
いづれをよめあめりあめりあめりあめりあめりあめりあ  
神宮にはあまの日向もあつたりてあまの日向もあつたり  
いづれ水もあつたりてあまの日向もあつたりてあまの日向  
日方よりあつたりてあまの日向もあつたりてあまの日向

月 春夏秋冬

昔八月のあつたりてあまの日向もあつたりてあまの日向

あつたりてあまの日向もあつたりてあまの日向もあつたり





曉

あけぼのの光をうけて  
あけぼのの鳥をうけて  
あけぼのの虫をうけて  
あけぼのの草をうけて  
あけぼのの花をうけて  
あけぼのの果をうけて  
あけぼのの葉をうけて  
あけぼのの根をうけて  
あけぼのの幹をうけて  
あけぼのの枝をうけて

朝

あさひの光をうけて  
あさひの鳥をうけて  
あさひの虫をうけて  
あさひの草をうけて  
あさひの花をうけて  
あさひの果をうけて  
あさひの葉をうけて  
あさひの根をうけて  
あさひの幹をうけて  
あさひの枝をうけて

夕

あさひの光をうけて  
あさひの鳥をうけて  
あさひの虫をうけて  
あさひの草をうけて  
あさひの花をうけて  
あさひの果をうけて  
あさひの葉をうけて  
あさひの根をうけて  
あさひの幹をうけて  
あさひの枝をうけて

夜

あさひの光をうけて  
あさひの鳥をうけて  
あさひの虫をうけて  
あさひの草をうけて  
あさひの花をうけて  
あさひの果をうけて  
あさひの葉をうけて  
あさひの根をうけて  
あさひの幹をうけて  
あさひの枝をうけて





はらきみ程のせんりよそとほろよそとよ一か  
きもるの海うゆるが月を宿のいめたり  
揚同治乃國屋のよと文用のねと結たてぬ

松

まねれと今一入とつねにうぬやうとせしうら  
まねしすおのほのよとせしうら  
炭のまねとつねにうぬやうとせしうら  
つねにうぬやうとせしうら  
あつむるの秋のうらなをのうぬやうとせしうら  
よのうぬやうとせしうら  
よのうぬやうとせしうら

杜

ひる年をまのあやなむひさかひのま  
ひる年をまのあやなむひさかひのま  
ひる年をまのあやなむひさかひのま  
ひる年をまのあやなむひさかひのま  
ひる年をまのあやなむひさかひのま

草

さうしに春乃ふ草乃りあふん年  
田乃りあふん年乃りあふん年  
友乃田乃りあふん年乃りあふん年  
は凡乃りあふん年乃りあふん年  
花乃りあふん年乃りあふん年  
和乃りあふん年乃りあふん年

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, occupying the top half of the page.

Handwritten section header or title, possibly a name or a specific reference.

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or document, occupying the bottom half of the page.

Handwritten section header or title, possibly a name or a specific reference.

Handwritten text in cursive script, occupying the top half of the page.

Handwritten section header or title, possibly a name or a specific reference.

Handwritten text in cursive script, occupying the bottom half of the page.



Handwritten text in a cursive script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a fluid, connected style across the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing the text from the previous page. It begins with a large character that appears to be '三' (three).

釋教

Handwritten text in a cursive script, following the section header. The text continues in the same fluid style as the rest of the document.

始りしとてあはれしむるは  
勅撰の集にほむるは  
りるはあはれしむるは  
れりしとてあはれしむるは  
一 凡そ夏はあはれしむるは  
らあはれしむるは  
れりしとてあはれしむるは  
はあはれしむるは  
はあはれしむるは

質公大明神居本地難剛觀真俗之道  
理於心雲迹惟新訪利生之神感於  
真和乎者我朝之風俗也 吟詠者非  
意ふ亦作也 今深二諦之危於意識  
忽著三業之悟於江樂狂言又狂言  
世也 是觀音實語亦實語也 思者  
又神慮如此之早懐 豈非于有意故尔  
云

詠百首和弁

春 二十首

春は花の川原のすむらひ  
谷乃たけさき一危乃危ら  
さきさきさきの川原





明石より白根に... 雲の影を... 山は... 谷は... 川は... 舟は... 鳥は... 虫は... 花は... 草は... 木は... 石は... 土は... 空は... 海は... 山は... 谷は... 川は... 舟は... 鳥は... 虫は... 花は... 草は... 木は... 石は... 土は... 空は... 海は...

秋 二十一

秋の... 雲の影を... 山は... 谷は... 川は... 舟は... 鳥は... 虫は... 花は... 草は... 木は... 石は... 土は... 空は... 海は...





Handwritten text in a cursive script, likely a title or a short passage, located on the left page of the manuscript.

Main body of handwritten text in a cursive script, spanning across the right page of the manuscript. The text is dense and appears to be a continuous passage.

吾大善菩薩者釋尊語陀一如之 初光神  
文八傷同祈之本源也 以和語和經又以信  
心信乎神如在之礼 讚法而満足 存有之法  
樂享而奉行 大神之擁護 通理句 遠于通  
小量之懇念 求願 豈有于 願就 獻法 道  
百句之要文 又 詞苑十之 風月 今 以 蘇  
云 深持 法輪 惟似 狂言 又 通寶 道 故 妙  
徑 八軸 之中 廿八 馬之内 取 百句 乃 百

題其詞云

詠百首和奇

江門如經の巻々  
中取百句

序品

如是我聞

我々もつとよらん 人の心もさそひのふとまも

合意の情也

我々もつとよらん 人の心もさそひのふとまも

我々もつとよらん 人の心もさそひのふとまも

照二東方

我々もつとよらん 人の心もさそひのふとまも

入於深山

我々もつとよらん 人の心もさそひのふとまも

志捨王位

我々もつとよらん 人の心もさそひのふとまも

其後嘗て佛号名曰弥勒

我々もつとよらん 人の心もさそひのふとまも

我見地明佛

有り大にひくしきくそく（はらけぬる難く約え  
方便品

其智慧門

何れらさしわ系常乃にむまふふら入んたさわ  
諸法實相

法の圓乃らあはのしゆはたあむれにのるよと  
止し不俱説

をへくしきくしきくはせむたふらふらふらふらふら  
礼佛而説

上場のひきくしきくしきくしきくしきくしきくしきく  
との法はらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

出現於世

今もくあゆんくしきくしきくしきくしきくしきくしきくしきく  
用佛知見

せしきくしきくしきくしきくしきくしきくしきくしきく  
唯一余は

しきくしきくしきくしきくしきくしきくしきくしきくしきく  
如我育所獻

あーるに乃道をもはらけり音あふらふらふらふらふら  
常自海滅相

音あふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
あまらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

はらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
はらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

若有同是法

こもみまねのりしつるまにけいへく末乃ねと  
知は常一せ性

世同相常一恒

あつははふしんるまふらなむかちのちんせ  
用ははと難

譬喻品

少言得作佛

はらふあふまふしんるまふらなむかちのちんせ  
はらふ火宅

等一大車

しんるまふらなむかちのちんせ  
悉是吾子

諸苦所因

はらふあふまふしんるまふらなむかちのちんせ  
信解品

無上寶聚

はらふあふまふしんるまふらなむかちのちんせ  
無上寶聚



すーあひてよからあふくよとてとてとる柳楊りまのこつて

律佛國と

りて人のなからあふくよとてとる柳楊りまのこつて

山宿草卷

原の宿ふりあふくよとてとる柳楊りまのこつて

報佛と具

海へてふくよとてとる柳楊りまのこつて

佛道聲

松の宿れあふくよとてとる柳楊りまのこつて

藥草奇品

現世安穩

後のせしあふくよとてとる柳楊りまのこつて

善言年等

くよからあふくよとてとる柳楊りまのこつて

海等所行と善言

志笑あふくよとてとる柳楊りまのこつて

投託品

無有魔事

事とてあふくよとてとる柳楊りまのこつて

心尚壞憂苦

此の如くあるは世に於ては... 神を  
化神奉旨

觀彼之遠

すも此の如くあるは世に於ては... 神を  
混冥入社可矣

なるに... 願以世功德善及於一切

を... 以是今因緣今説法種種

又... 權化非世也

... 権化非世也

はの道より... 五百弟子出

内秘善隆行

... 其不在世會汝昔為家説

は乃花... 不覺内玄裏

袖の如く... 人記品

我教既滿

... 法師

法師

は華教第一

常々なるをまげ乃はのらうとていふ所を  
まのふたのむらうとていふ所を  
三つまうとていふ所を  
度中三つ

栗和忠存衣

すまのれ袖をこころいひの師といふ海にまのふた

寂冥無人聲

草れ房小智し心しすまのらうとていふ所を

寶塔局

有七寶塔

のこわらふとて井のそとにありありの重のふた

柳諸天人置於地上

かすまそえうとていふ所を  
うつとていふ所を

皆在虚空

天のうらやまのそとにありありの重のふた

法華樹下

すのうらやまのそとにありありの重のふた  
をさうとていふ所を

擔負乳草

はかあなるとていふ所を  
か 拈花草れ鏡のふた

是名持戒

いふはとていふ所を

檀越音



涌出島

我常極極國

庭乃面一の光いしをみりつるの國の光  
とくしつるをみりつるの國の光  
又少るもの

壽聖品

無有生死

吉野山興の村に在るをみりつるの國の光  
常一在るをみりつるの國の光

壽命無殺切

如醫善方便

是とゆは佛の徳の如くはるをみりつるの國の光  
如醫善方便  
得入無上道

分別功德

清淨之果報

清淨之果報

不久詣道場

く  
随喜功徳品

如是展轉教

は  
法師功徳品

父母生所眼

あ  
唯得自明了

ら  
皆與實不相違背

日  
是人持此經

く  
不輕品

我  
我深取海等

く  
辭去遠白

く  
神方品

く  
現大神力

く  
即是道場

二乃回のあやむかしの大さ乃款乃移りしはらふれ  
於我城度後應交相新理

はのび佛の心むしむるはらふれ

鳴累呂

如世尊却

三乃のび佛の心むしむるはらふれ

各還卒七

しるす乃のび佛の心むしむるはらふれ

も室仏塔還可如也

大なる心むしむるはらふれ

藥王品

而自燃身

心はらふれ

寂第一

心はらふれ

心はらふれ

如佛得如

心はらふれ

心はらふれ

於此命終即往安樂世界

心はらふれ

心はらふれ

廣宣流布

心はらふれ

かゝるるをいふはたゞの事なりてはたゞの事なり

無諸表患

陀羅尼品

はたゞの事なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり

念ふ事

念ふ事なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり

無畏者

無畏者なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり

三十三もつとてはたゞの事なりてはたゞの事なり

種種に於て諸國に

種種に於て諸國に於てはたゞの事なりてはたゞの事なり

はたゞの事なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり

はたゞの事なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり

便得難歎

觀音品

便得難歎なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり

不般自心

不般自心なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり

普賢菩薩華

歩音品

普賢菩薩華なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり

普賢菩薩華

普賢菩薩華なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり

普賢菩薩華なりてはたゞの事なりてはたゞの事なり





歌佛法王以法此亦國之凡俗歎  
彰淨古一月輪矣

換分

以上各十首百首也

又嘗社者得名於春日未什之天悲  
光於秋心留世之月 和歌者是神  
國之風俗也 有便干以樂思短志示  
人同之吹慮也 且忘干枝疎歷四序  
号成意盡一 心子述懷若感意通  
交者蓋細受露露歸外其詞云

花 夏月 麻  
落葉 法文 春  
夏 秋 冬  
雜

以上各十首百首也

花

らほえくるくさみやまの梅さしこしはほり春の白雲  
姑くとも朝顔あつたるふみあきくさの春乃暖  
又より野たふさふ花よりあはれおのれおのれ  
竹葉のかりしとさしこしはほり春の白雲  
春のよきおのれとさしこしはほり春の白雲  
おのれをさしこしとさしこしはほり春の白雲  
おのれをさしこしとさしこしはほり春の白雲  
華のよき春のよきとさしこしはほり春の白雲  
花のよきとさしこしとさしこしはほり春の白雲

夏

卯夜の色さしこしとさしこしはほり春の白雲  
しきりおのれとさしこしとさしこしはほり春の白雲  
あしと花梅のよきとさしこしとさしこしはほり春の白雲  
夏のおのれとさしこしとさしこしはほり春の白雲  
なもとのよきとさしこしとさしこしはほり春の白雲  
夕のよきとさしこしとさしこしはほり春の白雲  
はほり春のよきとさしこしとさしこしはほり春の白雲  
すしはほり春のよきとさしこしとさしこしはほり春の白雲  
夏のおのれとさしこしとさしこしはほり春の白雲  
ふつとあつたおのれとさしこしとさしこしはほり春の白雲

麻

さしこしとさしこしとさしこしはほり春の白雲



春の風は木を揺るがす  
草花は色をばらばら  
鳥は空を飛びまわす  
川は水を流す  
山は緑をまとう  
花は香りをばらばら  
風は音をばらばら  
雨は音をばらばら  
雪は音をばらばら  
月夜は静けさをばらばら

夏

夏の風は木を揺るがす  
草花は色をばらばら  
鳥は空を飛びまわす  
川は水を流す  
山は緑をまとう  
花は香りをばらばら  
風は音をばらばら  
雨は音をばらばら  
雪は音をばらばら  
月夜は静けさをばらばら

春の風は木を揺るがす  
草花は色をばらばら  
鳥は空を飛びまわす  
川は水を流す  
山は緑をまとう  
花は香りをばらばら  
風は音をばらばら  
雨は音をばらばら  
雪は音をばらばら  
月夜は静けさをばらばら

春

春の風は木を揺るがす  
草花は色をばらばら  
鳥は空を飛びまわす  
川は水を流す  
山は緑をまとう  
花は香りをばらばら  
風は音をばらばら  
雨は音をばらばら  
雪は音をばらばら  
月夜は静けさをばらばら



うらやましきの暮かひらけのたの乃暗きまめ  
身おとよくらひらけのたのたのたのたの  
おのたのたのたのたのたのたのたのたの

難

わづらもなまらまきしうもておこるあま  
格のあまらひのあまらひのあまらひの  
かまゆみおのたのたのたのたのたのたの  
たのたのたのたのたのたのたのたのたの  
あまらまきしうもておこるあま  
あまらまきしうもておこるあま  
あまらまきしうもておこるあま  
あまらまきしうもておこるあま

位定町及恩賜く五冊一部  
かや

准三宮 佛判





